

素朴な概念の消去

林 禅之 (Yoshiyuki HAYASHI)

東京大学総合文化研究科博士課程／日本学術振興会特別研究員 (DC2)

かつて 18 世紀、燃焼という現象の説明としてフロギストン説が広く受け入れられていた。それによると、物体が燃焼するという事は、その物体に含まれるフロギストンが大気中に放出されるということである。したがって、一般に物体が燃焼すればその重量は減少するはずだ。しかし、金属を燃焼させると、その重量は増加する。これはフロギストン説の一つの大きな問題であった。この問題をアドホックでない仕方で解決できなかったフロギストン説は後に酸素説に取って代われ、フロギストンという概念は消去されることとなった。

概念の消去とは厳密にはどのようなことで、それはどんな意味を持つのだろうか。本発表では、素朴な概念の一つである「自己」概念に即してこの問題を考察する。その内容は具体的には以下の 2 つである。

第一に、一般的に自己概念を消去するための肯定的な議論としてどのようなものがあるのかどうかを整理・検討する。たとえば D. ヒュームのような古典的な束論者 (the bundle theorists) は、内観によって知ることができるのは諸知覚の束だけであり、それゆえ、それらを束ねる自己というものは存在しないのだと論じる。本発表ではまず、現代の束論者がどのような議論を展開しているのかを概観し、束理論を採用することから自己概念の消去が帰結するかどうかについて考察する。

第二に、素朴な自己概念がうまく適用できないように思われる特定の事例において、自己概念にどのような変化が及ぼされるのかを考える。とりわけ、自己概念の変化・洗練と消去の違いを明確化することを課題とする。自己という概念は幅広く柔軟に用いられるため、日常的な用語法においてほぼ淀みなく使用される。しかし、典型的な自己とは異なるようなあり方をしている存在 (解離性同一性障害、分離脳) や、そもそも自己であるか議論の余地がある存在 (PVS 患者、アルツハイマー病患者、胚) がこの現実世界において考えられる。さらに今後、BMI やスマートドラッグなど、科学技術による産物によって、従来の自己と大きくかけ離れた形の存在が生まれる可能性が考えられる。これらの事例を前にしたとき、素朴な自己概念をどこまで適用することができるかは自明ではない。本発表ではこのような特定の事例のいくつかを具体例として取り上げながら、それらの事例の存在から自己概念の消去が帰結するかどうかについて考察する。境界事例の存在から自己概念の消去が帰結することはなく、むしろ自己概念の変化によって対処されるだろう。発表の後半部分ではむしろ、概念の消去に焦点を当てるのではなく、概念の消去と変化の違いについて考察したい。